
ふくいミュージアム

1983. 3. 1

No. 3

福井県立博物館建設準備室

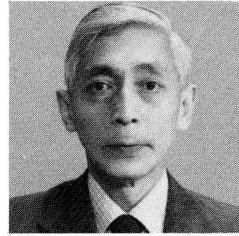


画文帯神獸鏡

地域における博物館

福井県立博物館建設準備委員

西川 新次



最近の世相のあわただしさ、変化のはげしさは、大きさにいえば人類がまだかつて経験しなかった現象ともいえようか。われわれの視野も目先だけを追いかけるのがせいぜいになり勝ちで、その間に不用意にも貴重な文化遺産が失われたり、われわれを取り巻くかけがえのない自然や環境までが一瞬のうちに変貌し破壊される危険にさらされているといってもいい過ぎではない。このような事態のなかで、地域ごとの博物館建設が全国的な規模で進められているのは結構なことで、むしろ遅きに失した感さえある。

地域における博物館の使命は、簡単にいえば、虚心にわれわれを培ってくれた自然や風土を顧み、歴史を考え、また未来を誤まらないために、欠くことのできない資料や文化的遺産を調査研究し収集保存して、地域全体の人々にその成果を公開し提供することにあるといえよであろうか。わが国に博物館が創設されたのは、明治4年(1871)に文部省に博物館が設けられ、翌年に東京湯島の聖堂が博物館として開かれたのが始まりです。それが今の東京国立博物館に発展し、やがて国公立や財団などの施設が順次造られるようになった。しかし、戦前はどちらかといえば中央志向意識が強かったり、上から与えられた博物館といった傾向がないではなかった。その意味では、これからの博物館が、人間一人一人の自然や風土、大きくいえば世界全体の文化的遺産に対する愛情がなければ成立し得ないのとは大きな

違いがあるといえよう。

このように眺めてくると、これからの地域における博物館の充実こそ、地域と国、あるいは世界をつなぐ大きな絆になるといっても過言ではないであろう。しかし、地域における博物館が、いわれのないお国自慢や自己卑下の場でなく、小型の中央博物館でもあり得ないことはいうまでもない。

それにしても、最近における地域ごとの博物館や美術館建設のブームには目を見はらされるものがあり、それに関連して批判めいた言葉も耳に入らないではない。そのもっとも代表的なものは、その建築の壮麗さに比して、ややもすればその展示内容や収蔵品が貧弱であるということである。しかし、将来に亘ってかけがえのない資料を保管し、しかも地域の人々がこれから末長く快い環境でともにみずからのことを考える場所である以上、それにふさわしい立派さであることは当然のことであろう。それよりもこわいのは、地域博物館存立の基盤が、住民の理解と愛情にもとづく情報や資料の提供にあることを忘れることであり、建物の完成を即博物館の完成と誤解して、基本的な調査研究、資料の購入、展示や普及活動に必要な予算の裏付けを、にわかには削減したり、安易な貸会場の特別展でお茶を濁すことになったりすることであろう。博物館が生きた博物館で忍耐よく息の長い努力によって、始めてその機能を発揮することを、地域全体の人が銘記することこそ必要といえよう。

略 歴

大正9年福井県武生市に生まれる
慶応義塾大学文学部芸術学科卒
日本彫刻史専攻
元東京国立博物館学芸部資料課長
現在 慶応義塾大学文学部教授

私たちは、県立博物館に期待します！

鯖江市舟津町 村上 智子

(鯖江中学2年)



昭和59年に県立博物館が建つことを知ったのは、担任の先生からでした。私達の鯖江市にある歴史資料館より規模が大きく、展示品も豊富だとか。

私が、県の歴史について知っていることといえば、新田義貞、朝倉氏、橋本左内などにまつわる話ぐらいです。現在の福井はこういう歴史を経て、今、どういうふうに歴史を創り始めているのでしょうか。

私達は、福井県に住んでいながら、福井について知っていることといたらごくわずかです。「ふるさと福井」を博物館でよく勉強してみたいと思います。報道された化石や鳥浜の丸木舟など、ふるさとの歴史がいっぱいつまった博物館が建つのは待ち遠しいことです。ふるさとの文化にいつでもふれられるみんなの歴史との対話の場となって欲しいです。

福井市上東郷町 岩佐 武彦

(福井市足羽地区連合青年団長)



「文化のふるさとづくり」をテーマに、県政ではいろいろな事業にとり組んでいます。県立博物館の実現で福井県もようやく文化を高めるための施設が整ったという感じです。私達の世代は、福井の生いたちというものをほとんど知りません。そんな私達が福井の自然・歴史・民俗などについて、古くさいとか間違いだとか否定するようなことが少なくなかったと思います。しかし今後は、博物館を通していいものは残し、不合理な点を改善していく目を養っていけるのではないのでしょうか。私達はふるさと福井の歴史・民俗というものを見つめ直し、この博物館を楽しく、夢のある生涯教育の場として積極的に活用し、「明るく住みよいふるさとづくり」運動を展開していきたいと思っています。

鯖江市幸町 西野喜美子

(福井県連合婦人会事務局長)



福井市街の北部、幾久公園の一角に現代的な感覚の県立博物館ができることを、主婦の立場から大変うれしく思っております。高度経済成長で私たちのくらしは便利にそして豊かになりました。しかし、物が豊かになるにつれて、その原点である長い歴史と、先人たちの努力で築かれた繁栄であるという感謝の心が次第に見失われつつあるような気がします。そのようなときに、総合博物館が建設されるのは大きな意義があると思います。私達主婦も視野を広め、社会の一員だという自覚をもって、このようなすばらしい施設を最大限に活用させていただかねばと思います。めまぐるしく移り変わる現代社会に生きる私たちは、1人の人間としてどのように生きるべきかを学ぶとともに、すばらしい先人との会話を……と夢がふくらみます。

福井市文京 山下 芳

(福井県社会科研究協議会長)



数年前、大英博物館へ行ったときのこと。古代エジプトのミイラ室で数人の中学生がスケッチをしたり、解説文を熱心に写していた。私はこうした実物から学ぶ力強い教育のあり方に深い感銘を覚えた。

いま、建設中の県立博物館では、人文系を主とし、自然系を背景として、子どもたちに幅広い実物教育の場を提供してくれることを、さらに、土器などに直接手にふれてみたり、昔の織機を動かしてみたりする体験学習室など、教育関係者多年の願いをかえてくれそうで、大きな期待をかけている。また、ビデオコーナーでは、目と耳を通して学習できるようになっているが、視聴覚教育の重要性がいわれているときだけに、非常にすばらしい試みといえる。子どもたちは喜んで利用することであろう。

ビデオライブラリーで楽しく学習!

福井県立博物館では、展示方式の特色の一つとして映像による展示を採用し、ビデオライブラリーの設置を計画しています。これは、2階の第2展示室に6つの小部屋（映像ブース）に区切った展示空間を設け、ビデオによって展示情報を提供できるしくみになっています。ここでは“絵の出るレコード”と言われるビデオディスクを採用して、鮮明な映像による展示を考えています。映像は、12分～15分程度の番組が40本収録され、入館者がこの中から見たい番組を、ボタン一つで自由に選択して見ることができるしくみになっています。また、ゆったりと見られるようにソファも用意します。

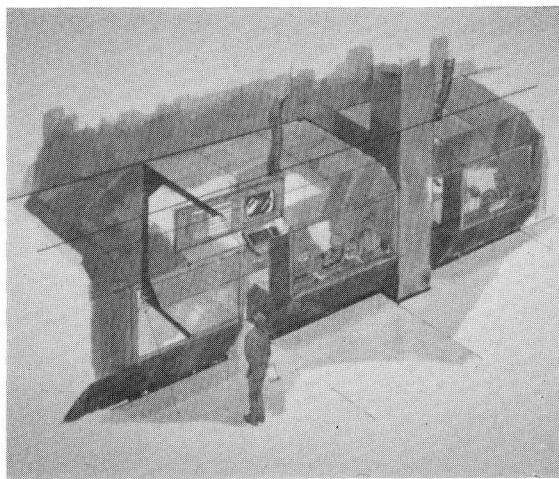
さらに、収録されている番組は、既存のものは使用せず、ほとんど新しく企画製作したものばかりで、他では見ることのできない当博物館独自のものとなります。現在着々と製作を進めています。番組は次のとおりで、まもなく完了します。

1. 福井の四季
2. 自然の資源と私たち
3. 縄文時代に生きる
4. 継体天皇の謎
5. 白山への祈り

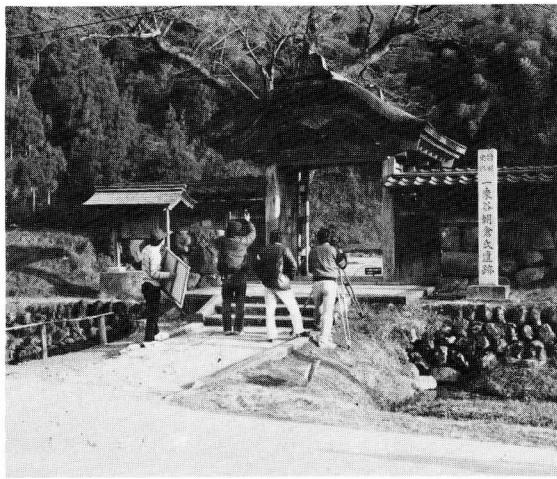
6. 一乗谷 一よみがえった戦国城下町
7. 祝部（ほうり）の村
8. トチの実を食べる
9. 機を織る
10. 大雪の中で 一雪とくらし
11. 真宗の村

このようなタイトルの番組に加え、さらに14本の番組を来年3月までに製作し、計25本の番組で開館時にスタートしたいと考えています。これらの番組製作にあたっては、入館者の方々に、常設展示でもどうしても表現しきれない内容などを理解していただくとともに、楽しく学習できるようにスタッフが知恵をしばって製作しています。

当博物館では、開館後もこのような番組の企画・製作を継続し、最終的に約40本の番組を見ていただくことができるようにしたいと思っています。さらに、社会の変化や科学の進歩にあわせて番組の内容も更新していくことも考えています。これら“映像資料”の製作は、一般資料の収集 同様に、県民の皆様様の御協力がなければできません。よりよい番組製作のためより一層の御理解と御協力をお願いいたします。



(ビデオライブラリー完成予想図)



(ビデオ撮影現況)

映像資料の役割について

「博物館は、ものを見て学習するところ」というのが、博物館の一般的なイメージのようです。このことは、博物館の展示の歴史を眺めた場合当然であって、博物館の在り方としては、近年までは基本的な課題だったといえます。しかし、このイメージはここ20年ほどの間に大きく変化してきました。つまり、近年の博物館における展示資料は、「物」と「情報」を意味しており、これらは具体的には実物資料・復元資料・模型資料・写真資料・映像資料・音声資料・図解資料・解説資料などがあげられます。このような「資料」を総合的に活用し、さらに、個々の資料を理解するだけでなく、その背後にある歴史・文化・自然などの体系をも理解できるように展示を構成していくことが大切であると考えられるようになってきました。

このような展示資料に対する考え方の変化の中で特に注目すべきことは、映像資料が重要な位置を占

めるようになってきたことでしょう。映像を展示に利用することの利点は数多く考えられます。その一つは、文字や写真などの「静止」展示では表現できない「動的な展示」ができることです。また、時間をひき伸ばしたり、あるいは縮めたりしてわかりやすく表現することもできます。このように動的な映像を利用することで、その事象をより一層理解することができるようになります。また、資料の収集、保存という点から考えても、形あるものとして収集、保管できない資料（例えば民俗行事等）も、映像によって保存していくことができます。

このような理由から、最近では各地の博物館の展示の中で、比較的簡単なオートスライド方式から、国立民族学博物館の“ビデオテーク”方式のような大規模なものまで、映像資料による展示が幅広く行なわれるようになってきました。そこで、当博物館でも、展示の中で積極的に取り入れることにしました。

今後、映像機器がより進歩するにつれて、映像資料が展示の中で占める位置はますます重要になるのではないのでしょうか。

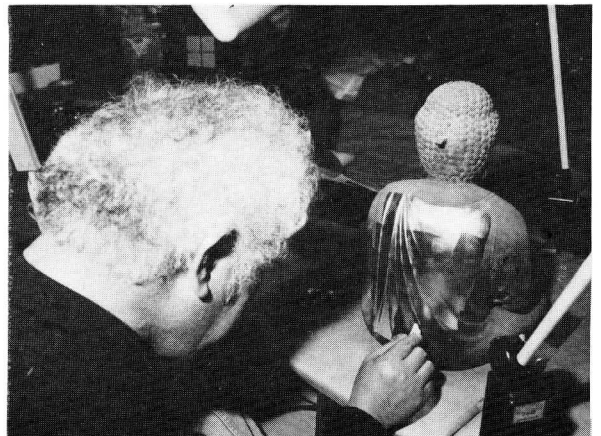
レプリカ製作始まる！

今年に入って、当博物館の展示資料となるレプリカ（複製品）の製作が始まりました。展示を構成するにあたって、いろいろの理由で、どうしても実物資料を展示できない場合に、このレプリカによってその内容を構成するわけです。現在では、ほとんどの博物館でその製作を行っています。

当博物館の一例として、朝日町大谷寺蔵の泰澄大師像外4点のレプリカ製作をご紹介します。作業は当博物館準備室職員の立会いのもと、専門業者の手で慎重に行なわれました。簡単にその手順を説明しますと、まず仏像全体に薄いスズ箔を貼って全体を保護します。そして、シリコン樹脂と石膏で雌型を作ります。今度はその雌型に合成樹脂を流し込んで雄型を作ります。あとはその雄型の細部を整形し、手描きで彩色をして完成です。この作業の中では、彩色に十分な時間をかけます。

こういったレプリカ製作にあたっては、地元の方々の御理解と御協力がなければできないものではありません。

今回の製作に際し、大谷寺御住職はじめ地元の皆様にはたいへんお世話になり感謝している次第です。今後も、このようにレプリカの製作を行っていきますので、皆様の御理解と御協力をお願いします。



(レプリカ製作の型どり作業)

博物館と調査研究

博物館の仕事は、資料の収集・保管・展示・調査研究・教育普及など実に多彩です。これらの事業内容全般については「ふくいミュージアムNo.1」で、すでに紹介しました。ここでは特にその中で博物館活動の基礎となる「調査研究」についてふれたいと思います。

我国の博物館が法的に社会教育機関として規定されているためか、博物館が行なう「研究」は不要だとする意見があります。その意見の内容は、博物館は社会教育機関なのだから学術研究をする必要がない。それに費す時間を展示や教育普及、資料収集・整理にあてるべきではないか、また学術研究は大学等の研究機関で行われているので、研究をそこに委託すればよいではないか、博物館では大学で行わない博物館学等の研究に限るべきだといったようなものです。

しかし、この意見は正しいのでしょうか。たしかに博物館は「社会教育施設」と法で規定されていますが、博物館において、展示や資料収集と、調査研究とは無関係なのでしょうか。否、この両者は決して分けて考えることはできないものなのです。その博物館の目的にあわせて調査研究し、その過程で資

料を収集、研究の成果を踏まえて展示・整理・保管されるべきものでしょう。また、博物館の必要とする調査研究を他の研究機関が行ってくれるでしょうか。仮にそれが可能としても、他人まかせでは、博物館としてテーマを見出し、よりよい展示計画ができるわけがありません。そうなると、展示企画まで委託しなければならなくなって、主体性は全くなってしまいます。

福井県立博物館では、基本構想の中で博物館の事業の一つとして「調査研究」を行うことを明確にしています。ここでは調査研究を博物館活動の基礎として位置づけ、資料の基礎調査研究・展示技術の研究・各分野の学術調査などを行うことにしています。これらの調査研究を通して得られた成果は、常設展示・特別展示・講演会・学習会等の教育普及活動・博物館研究報告等の出版物を通して、県民の皆様へ還元してゆきます。また、博物館が地域の文化財や自然に関する資料の情報センターとして、その資料の研究機関として、さらには資料や研究成果を生かした社会教育を行う教育機関としての機能を果たすには、地道な「調査研究」の積み重ねによらなければなりません。そして、名実共に博物館が本県文化の中核施設となるように、私たちは努力を続けていきたいと思っています。

仏像調査雑感

丸岡町吉谷の集落は県の北東部、石川県境となる火燈山の中腹にある。丸岡町の中心部から竹田溪谷に沿ってさかのぼり、山竹田から登っていく。ここは、中世、白山の越前馬場平泉寺と勢力を争った一大勢力、豊原三千坊のうち、吉谷千坊があったと伝えられる土地であるが、現在は廃村となっている。

丸岡町豊原の豊原家には平安末期の木造薬師如来坐像が伝えられており、白山信仰の遺品として注目されるが、その全盛期と思われる中世の遺品は、豊原三千坊が中世末期に焼失したためか、ほとんど伝えられていない。現在、丸岡町が旧豊原寺跡を発掘しておりその成果が待たれるところである。

その吉谷に仏像があると聞いたのは今年の夏であった。ちょうど県内で仏像の盗難があいついでいたこともあって、調査することになった。人の通らな

くなった山道は荒れており、集落は腰までの草におおわれていた。苦勞して捜した観音堂からは、藪蚊の大群がとび出してきた。

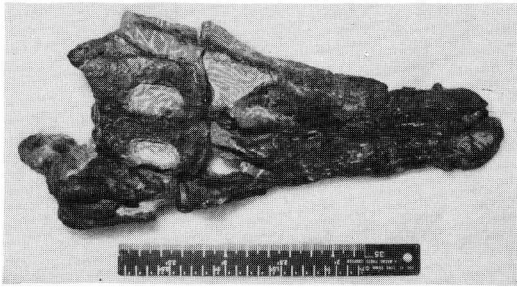
堂内に安置されていた仏像は、頭上に正面化仏と他五面をいただく千手観音坐像であった。補修部分の継ぎ目のカスガイが浮き、危ない状態で、とり扱いには神経をつかった。その像を厨子からとり出してみると、玉眼はくずれ、千手は新しい釘で打ちつけてあり、膝前は補修がなされていた。像高66cm、桧材漆箔の寄木造りの千手観音坐像で、各部に補修があるものの、この地域では貴重な遺品と考えられる。各部の法量等を測り、再び厨子へお返しした。

夏草の生い茂ったこの廃村の景観からは、往時の吉谷一千坊の繁栄はほとんど偲ばれない。しかし、すでに人々からは忘れられたこの観音像が、信仰の対象として吉谷の歴史を雄弁に物語っているのではなかろうか。

～収蔵資料の一部から～

中生代ワニ化石 (採集資料)

勝山市北谷町杉山川産出
中生代白亜紀初期(手取層群赤岩亜層群)



昭和57年7月、この化石は博物館準備室と同資料調査委員等によって採集された。化石は頭蓋・下顎骨・脊椎骨・鱗板骨などで、体長は約1.3mと推定される。共産するプリカトニオやトリゴニオイデスなどの貝化石から、ワニは淡水域に生息していたものと思われる。化石が産出した地層は、北陸三県や岐阜県にまたがって分布する手取層群の上部(赤岩亜層群)である。手取層群からは、これまでにトカゲの仲間の手取竜(福井)やカメ(石川)などの爬虫類の化石が産出している。ワニ化石の産出による学術的意義も大きく、さらに自然展示の中心的資料ともなる。整形を施し、開館時に展示したい。(東)

石刀 (受託資料)

大野市木本町 杉本憲治氏寄託
縄文時代晩期

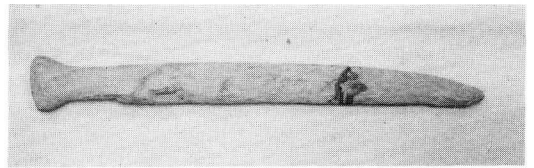
この石刀は、昭和30年頃大野市木本原の開拓工事中、一枚岩をめくったところ石囲いの中より発見されたと伝えるもので、全長41.3cm、刃渡り33.5cm、身幅3cm、千枚岩製である。

石刀は、石剣に似た棒状の石器であるが、断面はくさび形を呈し、刀のように1側縁に刃がつき、身が内反りに作られており、石剣とは区別されている。

1954年、山形県遊佐町女鹿の三崎山遺跡から殷代中期(BC1300年頃)の青銅製刀子が発見されたが、それは後に縄文時代後・晩期の遺物と伴出したことが明らかになった。この事実は、その頃大陸と東北

日本とに交流があったことを示すと共に、石刀などがこのような金属器の影響のもとに発生したことを物語るものと考えられた。

石刀の分布は、東北地方を中心にして北海道に達し、西は近畿の一部にも広がっている。県内での発見例は少なく、完形としてはこれが唯一のものである。この用途についてはいまだ明らかでないが、一般には呪術に関係するものと考えられている。(青木)



金銅板納札 (購入資料)

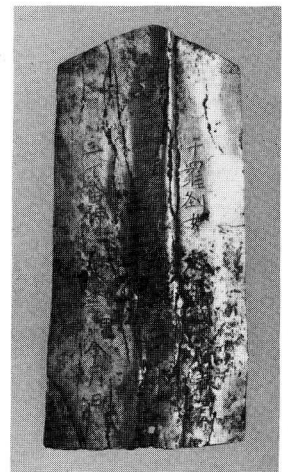
この納札は、高さ17.1cm、銅板製鍍金である。横方向に湾曲し、下端部中央に円形の小孔があることから、本来は納経のしるしに、寺社の建物の円柱に打ちつけたものと思われる。表面には、

十羅刹女 越前国本願春賀
(梵字バク) 奉納 法華妙典六拾陸部之内一部
三十番神 大永四年 卅 卅 卅 今日日
(1524)

という線刻の銘がある。中世から近世にかけて流行した、全国六十六ヵ国の寺社に法華経を納めて回る“六十六部廻国納経”

の遺品である。

島根県大田市の南八幡宮には鉄塔の中に全国の廻国聖が納めた小形経筒や納札が多数納入されているが、その中にも越前国の「春賀」の名を記す納札が伝存されている。本例とあわせ、同一の廻国聖の二度参りを示す可能性もある。(久保)



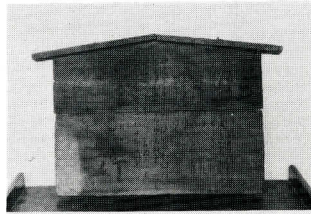
キリシタン高札

(購入資料)

江戸時代、幕府は民衆に法令などを周知徹底させるため、交通の要所や市場など人の集まる場所に高札を立てた。キリシタン高札はその中の一つで、キリシタンの密告を奨励する内容である。当時、幕府は寺請制度や宗門改などの徹底により、キリシタンの絶滅をはかっており、高札掲示もその政策の一つであった。

この高札は、正徳元(1711)年の御触れに基づくもので、ばてれんの訴人に銀五百枚、いるまん・立かへり者の訴人に銀三百枚、同宿と宗門の訴人に銀百枚とあり、宣教師や信徒を密告した者に莫大な褒美を用意し、密告を奨励したことがわかる。また、キリシタンであることが発覚すると、名主や五人組にまで罪が及ぶことが記され、制禁の徹底ぶりがかがえる。

越前に現存するキリシタン高札の中で、比較的古い時期のものである。(村野)



シ ュ ラ

(寄贈資料)

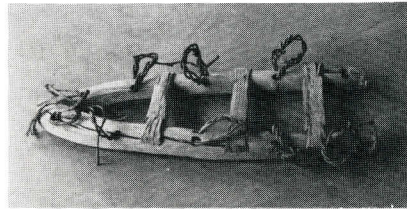
大飯郡高浜町日引 藤原又次氏

日引は京都府との境近く、内浦湾に面する半農半漁の村である。背後の山で良質の石材が得られ、戸数20戸余りのうち約半数の家が太平洋戦争前まで墓石などの生産に従事してきた。

シュラは山で荒取りした石材を、家まで運ぶ時に使った。コロなどは用いず、石や土の上を直接すべらせるのだが、傾斜の急な所ではスピードをおとすために後へ引かなければならなかったという。長さ1.3m、幅0.5m強。墓石1個分の石を運ぶのが普通だった。滑走板は固いモミジの木を使い、アリツギで棧をわたして全体をしっかりと組み立てている。

シュラは車に比べると著しく能率の低いものであるが、平地の少い日引では石材加工の最後まで使われてきた。地域の特色をよく物語る資料である。

(坂本)



資料の収集活動は博物館の生命です。県民ひとりひとりがつくる博物館を目指して、準備室では次のような資料を皆さんから求めています。

- 自然…動植物や化石、岩石、
鉱物などの標本。
- 考古…石器、土器、青銅器、
鉄器、埴輪、古瓦、
古鏡、経筒など。
- 歴史…古文書、古絵図、古地図、古写真、絵画、
甲冑、刀剣、仏像、仏画、仏具、など。

資料の収集に御協力を!

- 民俗…仕事着、ハレ着、飲食用具、田畑の用具、
漁撈用具、年中行事の飾り、芸能の楽器。
その他、繊維産業、伝統工芸に関するもの。

収集は、所有者や地元の意向を尊重しながら、寄贈・寄託及び購入等の方法で進めていきます。

これらの資料の提供、あるいは所在などの情報を大小にかかわらずお寄せください。お待ちしております!

ふくいミュージアム No.3 - 1983.3.1

編集 福井県立博物館建設準備室
発行 福井市大手3丁目17-1 (〒910)
福井県教育庁文化課内
☎ 0776-21-1111 ☎ 4223
印刷 出口印刷株式会社